

第 1 回策定検討委員会及び個別ヒアリングでの主な意見について

【第 1 回策定検討委員会】検討の主旨（計画の目的、スケジュール等）

主な意見

【委員長】

新たな計画でのハード事業の位置づけは、担当する部署に実効性を持たせることが必要である。

【委員】

- ・新たな計画を 4 回の策定検討委員会で策定することはできない。
- ・学識経験者は本日オンラインで参加であるが、この会議に対面で参加しないと、地域の声が伝わらない。そのため、次回以降はこの場にきてほしい。

【第 1 回策定検討委員会】骨子案の説明及び意見交換

主な意見

【副委員長】

- ・委員が納得できる目標像をしっかりと議論することが必要。また、里山の保全活用についても具体的に示すことが必要。
- ・（委員の発言を受け）計画策定の意義が問われる。計画策定に向けて、シナリオ通りではなく、慎重に議論を進めていくことが大切である。

【委員】

- ・（委員の発言を受け）将来像はこの内容で良いのか疑問に感じた。「知る」、「訪れる」、「働く」、「住む」についても再度、検討していくことが必要。

【委員】

- ・今後は、里山を集約し、予算をつけて守っていかないといけない。

【委員】

- ・観光客が増えると、オーバーツーリズムの問題が懸念される。住んでいる人にとっても良い計画にしてほしい。

【委員】

- ・事業を位置づける過程や実効性の担保が大切である。
- ・里山エリアの周縁部にも、気にかけてほしい。（バラックやヤードがある現状）
- ・観光客が私有地に無断で立ち入ることがある。
- ・市街化調整区域に住むメリットがない。山の維持管理する経費が必要である。

【委員】

- ・フットパスコース沿いに、モミジや桜等、季節ごとに楽しめるコースがあるとよい。
- ・地域を活性化させるには、お店の出店や果樹の植樹等が考えられる。
- ・市街化調整区域に暮らしている人にも、利益が出る計画を策定してほしい。
- ・都立大戸緑地で収穫したさつまいも等を、遊びにくる幼稚園児等には配布できるように、市から都に要請してほしい。
- ・小、中学校等を残せるように、この計画の場でも議論していきたい。

【委員】

- ・田の保全についても。高齢化が進み、担い手が少なくなっている。山には手が行き届いていない。

【委員】

- ・第2回策定検討委員会では、大まかに事業の絞り込みを行わないといけない。方向性がまとまっていない状態では、せっきくの議論する場がもったいない。

【委員】

- ・事務局が示した内容では、里山は荒れ、住み続けていくことはできない。そのため、区画整理事業が必要。
- ・国の特区制度を利用すれば、市の主体で区画整理事業を行うことができる。区画整理事業を実施するにも境界確定が必要。
- ・優良田園住宅の建設の促進に関する法律での、建築物の建設ができる。
- ・市街化調整区域の地区計画の運用も実際にはできない。土地を活用できるようにしてほしい。
- ・今回事務局が提示した内容では、計画は成立しない。

【委員】

- ・施設の建設、運営は地域の方との関わり方が大切である。
- ・山が荒れているが、資源として活用を見いだすことが必要。(椎茸の植菌、ナラ枯れ材の利用)
- ・この委員会の目的を達成するには、できない事を捨てる、できる事は何か、小さな案件でよい、成功させることが第一である。
- ・お手伝いにはお金を払うことが大切。ボランティアではいけない。

【委員】

- ・山の管理をしたことがない地主も増えてきている。山の管理の仕方や活用方法について、相談できる機会があるとよい。

【委員長】

- ・次回の策定検討委員会では何を集中的に議論するのか絞る必要がある。
- ・土地利用やインフラ整備の制度に関することは、場を変えることも必要。
- ・計画のPDCAサイクルについても、しっかり検討する必要がある。
- ・より地域との対話の場が必要。
- ・里山のPRよりも、うまく外部の方を内部に馴染ませる仕組みづくりが必要。
- ・ボランティアだけでは限界がある。

第1回策定検討委員会後の個別ヒアリング

主な意見

【委員】

- ・不法投棄が行われている箇所があり、対策を検討する必要がある。
- ・かつて、生育していたゼンマイ等の植物も、里山が荒廃したため見かけなくなった。
- ・市の荒廃した山林をモデル的に再生していくことから始めたほうがよい。

【委員】

- ・地域住民が受け入れることができる計画にしてほしい。そのためにも狹隘道路の拡幅が必須。(通学路を歩く子どもが危険。) 安心安全が解決された上で、里山の計画をつくってほしい。
- ・大都市近くなので、この地域には人が訪れやすい。反面、生活の場であるため、マナーを守らない人が訪れるのは困る。
- ・地域の方と共に、事業を進めることが必要。
- ・ナラの木が大きくなってきており、病気も発生している。以前は、10年周期で伐採していた。
- ・空き家も増えてきているので、活用できると良い。

【委員】

- ・別所や下堤には、産廃事業者のヤードなどが多い。
- ・特に黒川との境は、手が付けられない状況にある。
- ・子どもたちが安心して歩ける地域にしたい。
- ・町内会では退会者が増え、何かやろうとしても人が集まらない。また、「やらされ感」があり、続いていかない。
- ・黒川方面から多くの人を訪れているが、道標が少なく迷っている人も多い。

【委員】

- ・市でつくる里山の計画が、既に実施している里山の活動の後押しになるとよい。
- ・活動メンバーが高齢化してきている。女性や子どもが加わることで、長期的に保全活動を行うことができる。活動を行うには、お金や物資等の支援が必要である。
- ・南傾斜の土地が多くあるので、レモン等の柑橘類を多くの人で管理できるとよい。

【委員】

- ・三輪緑地のビジターセンターの建設が完了し、現在地域は落ち着いている。
- ・小山田小野路地域とは違い(住居から里山へは物理的に距離がある)、里山への関わり方は異なる。

【委員】

- ・里山環境を保全するには膨大なお金が必要。
- ・地域の方と溶け込もうとしない団体の活動は否定的である。市からの支援がなくなると、活動団体がいなくなるのではないかと。無償でもこの地域を良くしていきたいと思う団体がいることが望ましい。
- ・里山の保全を持続可能とするには、観光農園等、何かシンボルとなる事業が必要。人を呼び込むには大きな道路が必要。

【委員】

- ・都市基盤の整備が優先されるべきで活用とか保全はそのあとである。
- ・区画整理を行う予定の土地を市が購入したのだから、市が責任もって区画整理を行うのが筋だろう。
- ・山林が荒れ、耕作されていない農地が増えている。
- ・耕作されていない農地は積極的に転用を図るべきである。
- ・山林の再生は理解できるが、薪炭林に戻しても意味がない。
- ・山林の再生が土地所有者にどのような利益を生み出すのかみえない。

【委員】

- ・交流館や宿通り周辺の竹林の整備に取り組んでいる。
- ・何かやるときには、地域住民の理解が欠かせない。
- ・町内会との連携は重要だが、そのあたりの連携が希薄なところがある。
- ・交流館を拠点として、小野路町だけでなく、小山田エリアとの横のつながりが重要になると考える。